

研究課題名：日本人学習者による英語助動詞の学習可能性 must/have to, can/be able to, will/be going toを中心に

慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科修士課程2年

池野谷 美佳

研究概要

本研究では英語助動詞のmust/ have to, can/be able to, will/be going toを取り上げ、それぞれのペアの意味の違いについて言語学的見解を紹介し、日本人学習者がどのように機能的能力を習得しているのか調査した。

助動詞を使うための能力は、文法力の基本である。その理由は、話し手の心的な態度を表すというコミュニケーションにとって重要な役割をもつところにある。とりわけmust, can, willは、中学校で習う基本的な助動詞であるが、これらはhave to, be able to, be going toと言い換えることができると言われることがある。市販の中学英語問題集や参考書では、mustは「～しなくてはならない」「～に違いない」などの意味を表し、have toと言い換えることができる、というように、基本的な助動詞の意味については「言い換え表現」と「訳語対応」による説明が多い。しかし、本来助動詞の意味は多義的であり、状況によって言い換えられない場合もあるため、「言い換え表現」や「訳語対応」のような説明では捉えきれない。一方、これらの指導に変わるものとして、多義的な語彙の意味を「コア」という文脈に依存しない意味から統一的に捉えようとする考え方があり、すでに一部の高校教科書で利用されている。こうした流れの中、日本人学習者たちは、一体どのように助動詞を理解しているのだろうか。

そこで、本研究は、英語助動詞のmust/ have to, can/be able to, will/be going toの使い分けに関して日本人学習者の理解度の調査を行った。具体的には、日本人の大学生130名にアンケート調査を行い、受けた経験のある指導に関する質問と、must/ have to, can/be able to, will/be going toを使い分ける問題の回答を得た。また、各問題には、自分の選択にどれだけ確信を持っているのかを調べるため、5段階のスケールから最も近い自信度を選択してもらった。大学生の中には、高校までを日本で過ごした学生が108名と、高校までに1年以上英語圏で過ごした学生22名がいたため、前者をJグループ、後者をRグループとして、両者の違いを比較した。ただし、Rグループのうち、半分为1年～3年程度の滞在歴であり、10年以上を英語圏で過ごした人はほとんどいない。

結果、Jグループでは、受けた経験のある指導に関しては、「コア」を使った説明を受けたと答えた人が全体の17%であるのに対し、「言い換え表現」が51%、「訳語対応」が54%であることから、助動詞の意味指導の中心は「言い換え表現」と「訳語対応」による説明あることが示唆された。また、「特に意識して学んでいない」と答えた人は3%い

る。使い分け問題においては、「言い換え表現」と「訳語対応」の影響によると考えられる誤答が多く見つかっている。この傾向は英語のレベル別に見ても大きな違いが見られなかったことから、英語のレベルの高さに関わらず、最初に教わった内容に捕らわれている学習者が多いと言える。一方、Rグループでは、受けた経験のある指導に関して、「コア」を使った説明を受けたと答えた人が14%、「言い換え表現」と「訳語対応」による説明は両方とも32%である。しかし、「特に意識して学んでいない」と答えた人が55%であることから、Jグループとは対照的な結果となっている。しかし、使い分け問題においては、Jグループと類似した回答の傾向が見られ、日本語である母語の影響が示唆された。自信度では、どの問題においても、JグループよりもRグループの方がレベル間の自信度の差が小さかったことから、英語圏に滞在経験のある学習者の方が、間違いに対して恐れる程度が低いと考えられる。

さらに、現在採用されている中学英語検定教科書を比較し、助動詞がどのような意味で説明されているか調べたところ、全ての教科書において「言い換え表現」の記述がなく、助動詞の意味に対する扱いに変化が見られた。例えば、TOTAL Englishでは、will/be going toの場合、willは「平叙文で『～だろう』と予測したり、『～するつもり』という意志を表したりする」とあり、be going toは「予定されていること、起こりそうなことを言う」とある。Sunshine Englishでも、willは「『～しようと思う』と気持ちや考え、予定などを言うときは、<will + 動詞の原形>の形を使います」とあり、be going toは「『～するつもりです』と前もって決めていることを言うときは、<am [are, is] going to + 動詞の原形>の形を使います」とある。これは、コアの考え方が一部の高校の教科書に導入された影響と見られる。

以上のことから、助動詞を適切に選択するためには、「コア」の考え方に基づく指導の方法が可能性として挙げられる。「コア」は、日本語訳を介さず、様々な文脈であっても、学習者が助動詞の意味や、助動詞の中の細分化された意味が理解できる、という点で有効だと言える。しかし、助動詞のコアを有効に提示するには、学習者の年齢や英語力などによって異なる可能性があり、授業時の提示方法についても今後検討する必要がある。